

地 理 で 遊 ぼ う

——うちわを作った文化祭——

大 島 明*

I. 地理教育の守備範囲を広げよう

地理教育と言えば、当然のことながら地理の授業ということになる。少し広げて考えても地理研究部などの部活動のことぐらいまでが普通である。

だがしかし、地理教師と言えどもH・R担任もすれば生活指導や教務等のいわゆる校務分掌で走り回り、地理とは全く関係のない部活動の付添いに明け暮れて、中にはエネルギーの大半をこういうことに費しているケースも少くない。

本来の地理教育論を棚に上げてはいけないのだが、ここでは少し棚上げし後に触れるとして、授業以外のところでも「地理的」な仕事はできないかと考えてとりくんだ実践について、まず報告したい。

(1) 特別活動への拡大

ホームルーム活動、生徒会活動、クラブ活動¹⁾そして学校行事を指導要領では特別活動と規定している。この分野はどれをとっても「生徒を動かす」ことが求められるため、とりくむ教師にとっては相当なエネルギーと技術が必要となってくる。

とは言え、自分の専門に近い内容の指導となると授業とは違った自由な展開が可能だ

けに、教師の側も積極的な気持ちで臨むことができる。地理教師の場合、私自身も含めて遠足や修学旅行などには従来からよく携わってきてている。さらに、学校行事の中の文化祭やH・Rにも「地理」を持ち込んでみてはどうだろうか。文化祭にはH・R単位の参加という形が基本の高校が多く、H・R担当をすれば必ず「文化祭」は大きくのしかかってくる。が、授業ではやりにくいことにもとりくめる機会と考えてみてはどうだろうか。

ところで、近年生徒の自主的な活動の力が弱まっているとの指摘は現場の中にも多い。また、H・Rが生徒自治の単位という側面を失いつつあるという声もある。しかし、これらの原因は「今どきの高校生」のみにあるのではなく、指導要領の特別活動の項にみられるように、生徒自治の指導が稀薄になってきている²⁾ことなどとも関係が深いのではないだろうか。「生徒を動かす」ことは生徒が「動く価値がある」と感じて「動きたい」とまで行かなくても「動いてみようかな」と思わなければ押しつけ的または引き回し的指導になってしまふ。活動内容の意義が重要である。

(2) 今どきの高校生

高校生は「本モノ」に触れたがっているし感動もする。本当は仲間と手をつなぎたがっている。物事を力を合わせて成し遂げたがっ

* 大阪府立島本高等学校

ている。少くとも私にはそう見える。

しかし彼らは口では「だるい、いやや」を連発する。彼らには、どこに「本モノ」があるのかわからず、どうして手をつなげばよいかもわからず、今さし迫って手をつながなければならぬ理由も見当たらないからに過ぎないだけのことであろう。

事実、H・Rで「本場へ行って本モノ（この場合丸亀のうちわ作り）を見よう。」と言って方法を簡単に説明した時、積極的に応じた生徒は何人も出た。

自主活動や自治活動は「活動の意義」を説いても高揚しない。活動の内容が「すごい」とこと「おもしろい」ことが重要である。幸い地理教師は「本モノ」の所在もその調べ方も知っている。文化祭などで地理的なとりくみを考えてみると、そんなに困難なことはないはずである。

特別活動については、生徒指導サイドから今まで多くの実践や研究の蓄積があり、専門雑誌³⁾や単行本が多く刊行されている。しかし地理の世界では特別活動に関係した実践報告などはほとんど話題にのぼらない。しかし文化祭は修学旅行とならんでH・R活動の高揚期である。それだけに教師にとっても、授業とは少し離れた学習に生徒ととりくむチャンスでもある。

II. うちわ作りの店「丸亀屋」の文化祭

(1) 「わちはせんす屋」

例年9月末の文化祭の準備が6月ごろから始まる。各H・Rではそれぞれ出しものの検討を開始する。しかし、高校生としての文化的な水準を示しながら楽しめたるとりくみを見

つけるのは容易なことではない。生徒会担当やH・R担任は苦労している。

1991年度、私は3年生の地理クラス⁴⁾の担任をしていた。だから文化祭は地理の学習的な内容を取り入れて、しかも楽しいものにしたいと考えていた。

H・Rで1人の男子が発言した。「うちはせんす屋というのはどうや。」彼によると、うちわと扇子を仕入れて売るだけのことであったが結構多くの支持を得た。私はこのアイデアを支持しながらも、「売る」より「作る」に重点を置いたとりくみにしてはどうかと発言した。何か高校3年生らしいものをと考えていた生徒もあって、意見交換ののち結局「うちわ作り」と決まった。

文化委員の生徒のまとめによると「…うちわを買う本人に実際に好きなデザインで作ってもらってはどうかという風に決まった。しかし、実際にうちわを作ってもらうとなると作り方を覚え、そして材料をそろえないといけないのでどうしようとかと悩んでいると、先生が、丸亀という所でうちわを作っているので見に行ってみないかと言われた。それまでうちわがどこでどんな風にして生産しているか全く知らなかったので、丸亀が四国の町で、そしてごくふつうの家で手作りで作っている（家内工業や内職のこと）と聞いてびっくりした。その話を聞いて本当のうちわ作りを見たり、四国へ行くことになった。… …」とのことである。

『文化祭企画読本』という本があって、重宝されている。しかし、旅行がガイドブックだけに頼っては旅のおもしろさも半減するのと同様で、「本モノ」に学んでまねる方が格段におもしろいし、生徒も積極的になる。文

化祭で地理の学習と言うと、生徒はまず絶対に乗って来ない。しかし、クラブでなくH・Rなのだから地理の好き嫌いを問わずこの企画に参加させたいし、高校生らしい知的な遊びを楽しみながら、地理のオーソドックスな地域調査や巡検も少しあとり入れてみたいと思った。現地へ行くことに決めたのはそのためであった。

(2) 丸亀へ

最初は学校敷地内に自生する孟宗竹を利用して、丸亀へは技術を教わりに行く予定であった。しかし、うちわの骨などの細工は真竹でないと無理だとわかって、材料の仕入れが中心の目的になった。夏休みの1日「青春18きっぷ」を利用して日帰りすることとした。普通・快速列車にしか乗れない割引切符だが現地で5時間余の滞在時間があり、一応の活動は可能であった。これにはH・Rの文化祭企画委員7名が参加した。

丸亀では、まず香川県団扇商工業協同組合⁶⁾を訪問し、うちわ作りの材料仕入れについて打合せ等を行い、うちわ産業の概況について聞きとりを行った。それによると、業者は丸亀市塩屋地区に約50軒、うち問屋（協同組合も含めて）20軒、その他に内職多数と

のことであった。しかし職人等の高齢化が進んでおり、50才台なら若い方だという話、後継者がなく当代限りとなる業者も多いという話などを、教師からでなく現地で直に聞いたことは生徒に強い印象となって残ったようである。

その後、実際にうちわの骨組みをつくる仕事場をたずねた⁷⁾。そこへは乗用車3台に分乗して送ってもらったが、こういうことも生徒の感激をよびおこす出来事だった。

生徒は次のようにまとめている。

「丸亀に着いてうちわを作っている工場へ立ちよった時、そこが外から見たら隣に並んでいる家とそんなに変わらない一軒屋だったことが印象的でした。中はもちろん作業を行い易いようにはしてありましたが、大型機械が並んでいるようなことはなくて、手で動かして使うような小型で古い機械が置いてありました。竹を裂く作業をしていたおじさんの手つきはとても熟練していて、私達にはとても真似できそうもありませんでした。うちわを広がった形に整えていたおばさんの仕事ぶりもすごくて、みんなで圧倒されたことを憶えています。おばさんは10代の頃から家の仕事を手伝うといえばこの仕事だったと話して



写真1 西本団扇 竹割り作業



写真2 西本団扇で柄削りを実習する生徒

いました。骨組みに紙を貼る作業は別の工場でしているそうで、そこへ訪ねてもよかったです。ですが、ちょうど時期が終わった所だったので、どの工場でも作業していないと聞いてガッカリしました。でも滅多に見れない物を見学できたことは今も嬉しく思っています。」

(3) いよいよ文化祭

丸亀へ行ったことで企画委員の7人は積極的になってきた。あとは、文字通りH・R全員のとりくみとなるように広げることである。

したがって、まず2学期初めのH・Rで丸亀報告を行い、うちわ作りの店の名を丸亀屋とすることを決めた。とりくむ内容はうちわの製作、販売と丸亀に関する展示となった。うちわは、材料を売って自由に作ってもらう、H・Rのメンバーがその材料を使って作ったものを売る、製品になったものを仕入れて売る、の3種の方法で売ることになった。そして企画委員のメンバーは各係に分かれてそれぞれ責任者となった。最初の時点を考えたように、遊び的要素と研究発表的要素をあわせもつ「知的な遊び」のとりくみとすることに加えて、準備段階も当日も、とくに当日は来訪者といっしょに楽しむことを目指した。だから、一部の者のとりくみになってはならなかった。

当日、会場になった教室は中央部が「手作りコーナー」、周辺部が「販売コーナー」、壁面が丸亀のうちわ作りに関する写真と、地図と説明の「展示コーナー」となった。

うちわ作りにとりくむ来訪者は多く、準備した材料100余セットはすべて売れた。だが実は、生徒は「うちわ作りなんか面倒くさがって、お客様は来やへんでー。」と言って心配していたのだった。当日は盛況で「お客様

さんに教えることなんか、ようせんわ。」と言っていた生徒たちが生きいきとうまく「教え」ていた⁸⁾。H・R全員の協力が得られたのは、企画がおもしろなことに加えて、企画委員の生徒がみんなに呼びかけ、彼ら自身も楽しそうに動いていたからだと思っている。

その辺りのことについて、生徒の感想文から引用してみたい。

「文化祭の前々日から店の飾りつけが始まり、遊んでいた男子達も『うちわだから和風にしよう。』とか『この木、持ってきたからどこかに飾ろう。』などと協力してくれるようになりました。だんだんみんなの知恵が集まり、教室が店らしくなって行きました。

丸亀に行くことや展示準備にかかわってきて思ったことは、カラオケや食べ物屋さんをやるよりも、こういううちわ作りなどをした方がたくさんの人達の協力が得られるんだなと思いました。

展示準備でおこったり叫んだりと大変だったけれど、いろんなことをたくさん勉強できて、やってよかったと思いました。」

とにかく、文化祭企画としての「うちわ作り」は一応の成功をみた。最大のポイントは企画委員という中心メンバーと丸亀行ったことであった。「本モノ」に触れ、表面的ではあるがそこでの問題点を現地で直接見聞いたことが、必ずしも地理的認識を深められたと言うことはできないにしても、少くとも活動に迫力を持たせることになったことだけはまちがいないと思われる。

III. 地理学は何を教えるべきか

近年教育諸分野、例えば平和教育、環境教育などでもフィールドワークはどんどんとりくまれている。しかし担当者は必ずしも地理教師ではない。我々は地理の授業以外の場でも、もっと積極的かつ意識的に地理的な実践の展開を追求すべきではないだろうか。そうしないと、地理的な見方・考え方などと言っても、教育の現場ですら地理的事象についての物知り程度にしか理解されなくなってしまうのではないか。こう考えたことが拙い実践を報告した理由である。

さて肝心の「何を教えるべきか」であるが、その柱の一つは、地理的事実の調査、確認から分析を通じて、検証、判断にたどりつく言わば帰納的な思考技術であると考えてきた。このことについて、かつて「ただ統計的に分析するとか、文献的に調べ地域の細かい事象に立入らぬ地域調査ではなく、生徒自身にファーストハンドのデータを収集する能力を身につけさせることが重要である。正確に資料を入手して正しく解釈し、思考力、判断力を養うことが地域調査のめざすところであり、そうでなければ、与えられたデータを分析するマシーンになり、あらかじめ決まっている事実を捜すための調査にとどまってしまう。地域での検証を忘れて現状追認に陥ることは厳に慎まねばならない。」と述べたことがある⁹⁾。とくに、管理社会化が進行し、マスメディアを利用した世論誘導や世論操作が激しい今日、自分の手で事実を確認し、考え、判断する力、その裏付けとなる技術を身につけさせることは緊要な教育課題ではないだろうか。

ところで、この実践は新学習指導要領を意識したものではない。

新学習指導要領の特別活動の項では、生徒の自治的能力の育成という側面は弱く、自由化が声高に叫ばれる中、「日の丸」「君が代」の強制がきわだっている¹⁰⁾。この点については一般に強い批判が行われているところである。

地理に関しては何より社会科解体による大変身が特徴である。この点については以下のような批判を述べたことがある。「……具体的には異文化理解と統計処理、分析技術の修得に終始し、『二・三の事例を、理科的・政治経済的に扱わず、深入りせず』と事象を表面的に扱うだけで、極力判断を避ける傾向である。『方法についてや、分析する手法を考察させる』『動向に留意させる』というだけでは、現象を認識させるだけに終わり、問題の因果関係とかその解決法を考えさせるという社会科学的視点の欠落につながるのではないだろうか¹¹⁾。」価値判断を伴わなければおもしろいはずではなく、受講者数の増加などを期待することは困難ではないだろうか。

IV. 今後の実践について

今回の拙い実践については、これを通じて生徒がどのように成長したのかはっきりしていない。また地理的な学習成果もまとめは不十分なままであった。言わば、生徒指導面、学習指導面とも中途半端に終わったようなものである。特別活動に地域調査などの学習的方法を持ちこんだ場合、限界はあるものの、活動の中で生徒は成長を見せる。単に文化祭をうまくやるだけでなく、その活動の規模に応

じて目標を具体的に設定して生徒にも理解させた上でとりくむべきだと思う。そうして今後も伝統産業や、さらに産地直送販売などで手に負えそうなものを文化祭に持ち込んでみたい。

本来、地理の授業の中で地域調査を柱とした実践を展開すべきことは言うまでもまい。現代社会が教育課程に登場するまでは私たちも毎年積み重ねてきた¹²⁾。しかし、授業で全員対象に展開するには幾つもの条件が整うことが必要である。今回の実践は限定された条件のもとにおける、言わば「小型の実践」と考えている。

〔付記〕本報告は1992年度立命館地理学会大会シンポジウム「地理学は何を教えるべきか(1)——地理教育の現状と展望——」で報告した内容に加筆したものである。報告要旨について御指導いただいた山口平四郎先生、報告の機会を与えて下さった諸先生方に厚く感謝申し上げます。また、卒業後感想文を寄せて下さった島本高校16回卒業生北村義典君、上田真由美さん、杉谷美絵子さんにも記して感謝の意を表します。

注

- 1) クラブ活動とは、いわゆる部活動ではなく、授業時間に組み込まれた「必修クラブ」のことであるが、条件整備が極めて不十分で問題が大きく、部活動と統合しているところもある。

- 2) 新指導要領では、第3章特別活動、第2内容、Aホームルーム活動の項では「……生徒が当面する諸課題への対応や健全な生活態度の育成に資する活動を行うこと。」と記されている。
- 3) たとえば、全国高校生活指導研究協議会編『高校生活指導』明治図書、安部欣一編『月刊ホームルーム』学事出版等の雑誌が発行されている。
- 4) 現行教育課程で社会科は、1年現代社会4、2年世界史3、3年日本史4。以上全員必修。この他3年では、地理、政治経済、倫理各3より1科目必修選択、さらに他教科もあわせた選択科目の中に日本史、世界史、地理各3単位のうち1科目履修可。
- 5) ここでは必修選択の地理クラスを指す。
- 6) 「問屋」のうち最大規模業者。丸亀市役所の紹介による。
- 7) 西本団扇。実際に竹を割ってうちわの骨を作る仕事を見て、生徒共々骨作りをまねるのは無理だと観念した。したがって材料としては、すべて香川県団扇の「うちわキット」を買うこととした。
- 8) 生徒会から技能賞（大相撲をまねて、アイデアや技術的侧面を讃えた賞）を受賞。
- 9) 川本美智代・岸田修一・大島 明「新学習指導要批判」、地理34-4、1989、60-61頁。
- 10) 新学習指導要領では第3特別活動の中で「入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする。」と記されている。
- 11) 川本・岸田・大島、前掲9)。
- 12) 川本美智代・岸田修一・大島 明「授業のなかの野外巡検」、地理27-8、1982、46~52頁。